

広島別院だより

Vol.51
冬号

真宗大谷派（東本願寺）
広島別院教化委員会 発行

報恩講厳修

十二月三日・四日に報恩講が勤まりました。講師は福山市の藤間哲祐師(備後組明正寺)です。以下、法話の抄録です。

●念仏をどのようについたらいいのか

報恩講は親鸞聖人の御命日を縁として聖人のご恩に報いる仏事である。では聖人のご恩に報いるとはどういうことか。それは私自身が念仏申す身となることである。念仏者の誕生こそが聖人の生涯願われたことなのである。しかし念仏をどういたしているかが大事である。人によっては南無阿弥陀仏と聞いて葬儀を連想する人もいるだろう。以前、高齢者施設での法話を頼まれ法衣を来て訪問したところ、施設の近所の方に「誰か死にましたか？」と問われたことがある。どうやら世間には仏教・念仏＝死というイメージがあるらしい。では南無阿弥陀仏と称える意義とは何か。そのことを親鸞聖人がどのように念仏をいだかれたかを通して確かめていきたい。

●念仏に仏の智慧と慈悲を聞く

南無阿弥陀仏と念仏申すことは阿弥陀仏の名を呼ぶことであるが、阿弥陀仏とは単なる名詞ではなく、仏の智慧と慈悲のはたらきを表している。智慧とは道理の分からぬ愚痴の身を生きる私たちに事実を事実として知らせるはたらきである。これは事実から目を背けようとしている私たちにとっ



藤間哲祐師

て耳の痛い厳しさである。

対して慈悲はどこまでも衆生に寄り添い続け、決して見捨てない仏の優しい心である。この智慧と慈悲は別々のものではなく、智慧は慈悲に裏打ちされた一体の心であり、念仏は仏の智慧と慈悲のはたらきを賜るということなのである。

●念仏に生きる力を賜る

念仏により仏の智慧と慈悲のはたらきを賜るといふのは襟を正して新たに歩み始めるといふことである。聖人は八十五才の時、夢告に「弥陀の本願信ずべし」といふ文を感じられた。このことについて曾我量深師は「老境に入った聖人は人生の為すべきことは為したのだから、あとは静かに念仏して一生を終えようと感じておられたのではないか。しかし与えられた尊い一日一日を空しく過ごしては駄目だぞという厳しいご催促を聖徳太子の夢告から受けられたのである。そこからあらためて新訳の経典を読み直し、『正像末和讃』を著されたのだ」(已上要約)

念仏申すというのは今生きているその時のいのちを完全燃焼して生きていくことであり、生きる力を賜るのである。

●念仏によって本来の自己に戻る

南無というインド語は、中国で帰命と訳された。日本語で言えばおまかせである。つまり南無阿弥陀仏とは阿弥陀仏にすべてをおまかせするということである。しかしこの南無する心は本来、私たちの心からは出てこない聖人は言われる。ではその心はどこから生まれてきたのか。例えば親が幼子に「○○ちゃん、お母さんだよ」と呼びかける。そこから自分を○○と認識し、親を知るのである。それと同じく私たちは仏から常に呼ばれ続けてきたのだ。つまり

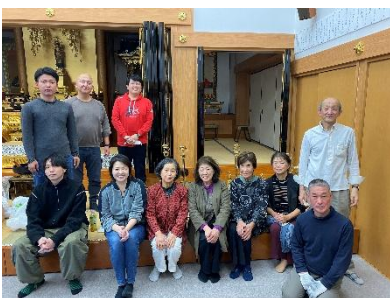
念仏申すことで、阿弥陀仏に願われながら自分は生まれてきたのだと認識するのである。そのことを親鸞聖人や多くの先人が伝えてきた歴史がある。南無阿弥陀仏は私の口から出ているが、そこには私の中に刻まれた深い歴史があり、念仏申すことで、どれほど深い願いがこの身にかけられているかを知るのである。またある人は「人はみな、本来求道者である」と言う。そのことを忘れて生きている私たちに念仏は本来の自己を思い出させてくれるのである。



御伝鈔の拝読

仏具のお磨きを行いました

十一月十四日、仏具のお磨きを行いました。安芸南組のご門徒を中心に十二名が参加されました。ピカピカの仏具で報恩講を迎えることができました。



誠に有難うございました。

親鸞聖人の生涯を辿る

晩年

関東教団の動揺は善鸞との親子の縁を切ったことで一応の決着がついたようです。親鸞は高齢における義絶の悲しみの中でも、関東からの信仰上の疑問について丁寧な答えるなど、精神的に活動します。師である法然の書物を書写して教えを確かめ、八十五歳の時には「弥陀の本願信ずべし」という文を夢の中で感得し、かな聖教である『正像末和讃』を作成します。

八十六歳頃から親鸞は病気がちになりますが、それでも弟子との手紙のやり取りは続けていました。なかでも最後の法語といわれる『自然法爾章』は、老境に入った親鸞思想の集大成とも言われています。

しかし九十歳になると、いよいよ体力もなくなり起き上がれなくなりました。親鸞の心残りには、娘の覚信尼がどう生活するかだったのでしょうか。所領のある妻の恵信尼はともかく、関東からのお布施で生活していた親鸞は、譲り残す所領もありませんでした。そこで懇意にしていた常陸の弟子たちに、覚信尼親子の面倒を見てくれるよう頼んだのです。

法座・講座等のお知らせ

2月7日(土) 仏教入門講座 (第2シーズン)



【講師】 真城義麿 先生

【日程】 毎回 13:30～16:00 【会費】 500円

〈日常生活の様々な疑問を仏教に学ぶ講座です。ぜひご参加ください。〉

3月23日(月) 春彼岸会



【講師】 福山市 寶田院 住職 三須誠 師

【日程】 14:00～勤行と法話
16:30 終了予定

〈彼岸とはさとりの世界。昼と夜の時間が等しくなるお彼岸の時節に偏りのない
仏様の教えを聞く法会です〉

毎月5日 定例法話 (ご今日の集い)

【講師】 県内僧侶(月替わり) 【日程】 14:00～勤行と法話(15:00 終了予定)

〈広島別院開基 教如上人の御命日(毎月5日)に法話会があります。〉

道場樹【編集室より】

何年前からスキーのコーチとして携わっているのだろうかと思つてみた。十年前にまぐれで国体に出場して、翌年は息子と一緒に国体に出場するぞ!と意気込んだけれど予選落ち。その翌年2018年の息子のインターハイ出場時から、ジュニア(中学生・高校生)のコーチとしてあちこち行っている。5年前から年末は毎年、群馬県での合宿に行っている。去年も定宿(いつも泊まる宿)に着いていう言葉は、「ただいまあーって言うつと、「おかえり!」と女将さんや料理長が出迎えてくれる。「運転つかれたでしょう?」って女将さんが気遣ってくれる。自宅から片道約780kmの道のり。長距離運転、確かに疲れるけれど、最近、慣れてきて一〇時間走れば着くよね?みたいな感覚に。(誰に聞いてもオカシイ!って言われる 笑)

でも、一番癒されるのは、「おかえり」の一言。そう!安心して帰る(還る)ところがあるってことが本当に仕合せなことなんだよなあ。ってあらためて思う。

(G・M)

